

## 摩利支天をめぐる言説と美術②男尊像

吉田典代

摩利支天は経軌に「天女」または「似天女形」と記されており、白描図像集には左手に天扇を持つ天女形の像が採録されている(図1)。しかし平安時代前期には、摩利支天を男尊とみなす言説が存在した。中世には、右手に天扇を持つて倚坐する摩利支天の画像が請来されたが、その口元には髭が描かれている(図2)。また近世の摩利支天像の中には、明らかに男尊として造形された例が多い。

これらのうち、図2のような摩利支天倚坐像に関しては、近年の研究で、本来は帝釈天像であったことが明らかにされた。<sup>(1)</sup>長い伝来の間、尊名が不詳となり、天扇を持つという点で図像の似た摩利支天とみなされたのである。また男尊説に関しては、これを唱えた安然、およびそれを引用した文献以外の資料がまだ揃っていない。<sup>(2)</sup>したがって本稿では、近世に制作された男尊の摩利支天像に関して検討したい。

## 1 猪に乗る摩利支天

摩利支天は、密かに所持することが経典で奨励されたためか、古代・中世の作例は、図像集以外にはほとんど見出すことができない。現存する作品の多くは近世のものである。その中には、天扇を持つ一面二臂の伝統的な天女形が存在する一方で、明らかに男尊として制作された作品も存在する。ただ男尊像の図像は一定していない。面臂の数に關しては一面二臂・三面六臂・三面八臂等のケースがあり、坐像・立像の双方がある。着衣の面でも、条帛と裳をまともの、甲冑をまとものなど、多様性に富んでいる。しかし、いずれも猪に乗る点は共通している。

猪を座とする摩利支天像は、唐代までに漢訳された摩利支天の経軌には語られず、宋代・九八七年に天息災が訳した『大摩里支菩薩經』になって現れる<sup>3)</sup>。全七巻から成るこの経典において、摩利支天の図像は一七箇所で説かれている。それらの間には差異が存するが、三面六臂または三面八臂という、多面多臂の像容を説く点が新しい。脇面の一方は猪面である。猪に乗ると規定するのは五箇所、猪車に乗ると規定するのが五箇所。持物は金剛杵、絹索、弓、箭、針、線、鉤、無憂樹などが挙げられている。特徴的な持物である針と線（糸）は、冤家の目や口を縫い閉じて災いを避けるためであるという。立像の場合は舞踏のごとき姿勢で、足の下には風輪（半月形）がある。

『大摩里支菩薩經』は、平安時代末期の図像集『別尊雜記』に書名が掲載されることから、平安時代後期には請来されていたと考えられる<sup>4)</sup>。また、この経典の所説を踏まえた猪に乗る摩利支天像も請来されている。一つは、『十巻抄』等の白描図像集に採録される三面八臂像（図3）である。主面の頭上に宝塔を戴き、主面と右脇面は穏やかな顔立ちであるが、左脇面は醜惡な相を示す。胸前に左手で弓、右手で矢を構えている。その他の持物は、右手が上から

三叉戟・独鈷杵・針、左手が上から索（水索）・無憂樹・糸である。『大摩里支菩薩經』では「童女」「八歳童女」などと規定されるが、図では襠褌衣の上に条帛を巻くという男女ともに用いる着衣のため、外見で性別は判断できない。猪は向って右を向いて立ち、その背には半月形が置かれている。摩利支天は右足を軽く曲げ、半月上の踏割蓮華に左足で立っている。

この図像は、『別尊雜記』や『四家鈔図像』、称名寺本『覚禪鈔』、『阿婆縛抄』、醍醐寺の『天部形像』や『醍醐寺本図像（仏眼等）』にも掲載されている。<sup>(5)</sup>このうち『別尊雜記』と『天部形像』で「唐本」の注を付すことから、宋からの請来品であったことがわかる。図像集に見る二臂の摩利支天像が、少ないながらもバリエーションを有するのに対して、三面八臂の摩利支天像は巧拙の差や写し崩れはあるものの、ほぼ同一の図像を示しており、請来された祖本は一点のみであった可能性が高いように思われる。今のところ、この図像を用いた実作例は知られないが、長谷川派を継承する仲家に伝来した仏画粉本の中にこのタイプの下絵が存在するため、<sup>(6)</sup>近世にはこうした摩利支天像が作画されていたのであろう。

もう一つの猪に乗る例は、元からの渡来僧・正拙清澄（一二七四〜一三三九）ゆかりの摩利支天像である。頭を外に向けて円陣を組む七頭の猪の上に、三面（右面は猪）六臂の摩利支天が坐している。穏やかな表情を浮かべ、襠褌衣を着用しているため、性別は判じがたい。天息災訳の經典では猪の数を規定しないが、インドの摩利支天像は七頭の猪に乗っており、<sup>(7)</sup>太陽神スーリヤ像の影響を受けたと考えられている。中国の摩利支天像の中にも、インドの作品に倣って七頭の猪に乗る例や、七頭だての猪車に乗る例が見出される。<sup>(8)</sup>こうした状況から判断すると、七頭の猪に乗る図像が日本で經典に基づいて考案された可能性は低く、中国からもたらされた図像であると考えられる。このタイプの摩利支天像は、正拙清澄が開山となった寺院に祀られ、法脈の正当性を保証する役割を果たしたとみなされている。

る。<sup>(9)</sup> 猪という台座は經典の文言のみならず、こうした作品を通じても周知されるようになったのであろう。

## 2 疾走する猪

ところで、図像集に掲載される三面八臂の摩利支天像では、猪は横を向いて静かに立っている。摩利支天も右足を軽く曲げるのみで、強い動きは感じられない。しかし江戸時代の男尊像の中には猪が疾走し、その上の摩利支天も大きな動作を示すものがある。代表的な例として、江戸時代中期に大衆向けの仏像百科として出版された、『仏像図彙』所載の摩利支天像を挙げよう。

元禄三年（一六九〇）の序文を有する『仏像図彙』（『仏神靈像図彙』とも称される）には、二種類の摩利支天像が掲載されている。一点は一面二臂の立像で、右手に天扇、左手に植物を持つ。頭部は天女のように見えるが、袍に袴袖を付けたような不思議な装束をまとっている。もう一点は一面六臂で炎髪、火炎光背を負う忿怒形像である（図4）。後脚を蹴り上げて疾走する猪にまたがっている。左右の手で弓に矢を番えて射る勢いを示し、右上手に刀、左上手に天扇、右下手に宝棒、左下手に戟を持つ。絵師や編者は定かでないが、義山なる人物の跋文が付されている。<sup>(10)</sup>

『仏像図彙』は、のちに土佐将曹・紀秀信を画工として、増補改訂版が出版された。<sup>(11)</sup> 『増補諸宗仏像図彙』と題され、天明三年（一七八三）の秀信の識語がある。摩利支天の図像は大幅に改められ、一点は左手に天扇を持つ一面二臂の天女坐像、もう一点は疾走する猪に立つ三面六臂像（図5）となっている。後者は少し忿怒の相を浮かべ、髪を逆立て、鎧を身につけている。右手には上から刀・矢・宝棒を持ち、左手は天扇・弓・三叉戟を持つ。猪は後脚を高く蹴り上げて疾走し、摩利支天はその背に右膝を大きく曲げて立っている。

そして江戸時代の動勢の強い摩利支天像は、元禄版『仏像図彙』のような一面六臂で猪にまたがるタイプ（便宜上Aタイプと呼ぶ）と、天明版『増補諸宗仏像図彙』のような三面六臂で猪に立つタイプ（Bタイプと呼ぶ）に分けることができる。

管見に触れたAタイプの作例は、ポーズや持物など、元禄版『仏像図彙』とほぼ同一である。

①伊勢国常明寺の僧・宗存が上梓した「九重守」の摩利支天像 図6

②「光明山奥之院」の銘を付す紙本墨摺の摩利支天像 図7

③京都市芸大蔵 六角堂能満院の仏画粉本二二三号 図8

「九重守」は、多数の神仏の画像・種子曼荼羅・陀羅尼等を摺写した小型の巻物で、寺院などが開版し、お守りとして頒布した。宗存版「九重守」は神力を願主とし、台林を工匠として、元和頃（一六一五～二四）に開版された<sup>(12)</sup>と推定されている。復刻版や、宗存の刊記を省いた版も作られており、長期にわたって流通したと考えられる。摩利支天像は、元禄版『仏像図彙』よりも描写が精緻で動勢が強い。

②は一枚摺りの摩利支天像で、画面が大きいだけに、摩利支天の表情や髪型、猪の毛並みに至るまで克明に描写されている。左上手の天扇は軍配団扇のような形態で、卍が描かれている。③の図様は②と酷似しており、同一の祖本の存在を思わせるほどである。

一方、Bタイプの作例を列挙するならば、

④滋賀・市神社蔵 紙本木版着色 摩利支天像（便宜上、甲本と呼ぶ） 図9

⑤滋賀・市神社蔵 紙本着色 摩利支天像（便宜上、乙本と呼ぶ） 図10

⑥法隆寺蔵 紙本着色 摩利支天像<sup>(13)</sup>

⑦京都市芸大蔵 六角堂能満院の仏画粉本二二三一号 図11

⑧京都市芸大蔵 六角堂能満院の仏画粉本二二三二号 図12  
などがある。<sup>(14)</sup>

これらの作では、いずれも弓に矢を番えて射る構えをとり、天明版『増補諸宗仏像図彙』より一段と勇ましい雰囲気である。④・⑥・⑦はほぼ同一の図像で、三面とも額に第三眼を開き、炎髪の忿怒相で、髭をたくわえている。鎧をまとい、下の両手で鉾を持ち、右上手に刀、左上手に軍配様の天扇を振り上げる。向って右方向に疾走する猪は、後脚を強く蹴り上げている。猪の背には法輪があり、摩利支天は右膝を高く挙げ、左足で法輪を踏まえている。④と⑥は炎光背を伴い、⑦では右下手に宝棒を書き添えている。天明版『増補諸宗仏像図彙』の摩利支天像は、きりりとした表情の女尊にも見えるが、④・⑥・⑦は明らかに男尊である。

⑤の市神社・乙本は、三面三眼の忿怒相で炎髪。下の手に鉾、右上手に刀を持つ。左上手の先からは、法輪が前方に放出されている。疾走する猪の背に蓮華座を載せ、左足で踏んでいる。上部には雨宝童子と、烏をはらんだ日輪が描かれている。

⑧の京都市芸大・二二三一号像は静かな怒りをたたえた相貌で、鎧をまっており、武将神像のようである。右上手に天扇、左上手に鉾、右下手に刀、左下手に宝棒を持つ。頭光として輪宝光を用いる点も、武将神像に通じている。このような摩利支天像を『十巻抄』等の三面八臂像と比較すると、表情は柔和な相から忿怒相へと変わり、持物の弓矢は射る姿勢へと変化している。他の持物も、無憂樹や針・糸にかわって武器が主体となるなど、武神の性格が強まっているのがわかる。

ところで台座の猪にまたがり、あるいは疾走する猪上に立つ摩利支天像は、大威徳明王像を想起させる。この点に

関して江戸時代中期の国学者・天野信景は、随筆『塩尻』の中で次のように評している。<sup>(15)</sup>

「摩利支天の像 今世に見る様は 大威徳明王を一面にし 鋒を団扇にし 輪宝を鉾に持ちかへさせ 牛を冢にかへたる也 是を俗伝の像と云々 全く密家相伝の像にあらず あるひは輪宝を射る姿もあり 勢のよき様にして 事をもしらぬ武士を欺しものなり 小野広沢両流伝来の儀軌の像は 形像天女にして 明王夜叉部にあらず 三摩耶形は団扇也」

『塩尻』は、天野信景が元禄一〇年（二六九七）〜享保八年（一七三三）に執筆した随筆を、天明二年（一七八二）に門人が編纂したものである。信景は、小野流・広沢流のごとき伝統的な密教の流派では、摩利支天像は天女形であるという知識を有していた。しかし当時流行の摩利支天像は、大威徳明王の持物や乗り物を改変したような形であり、このような状況に対して、俗説で武士を欺くものと苦言を呈している。

### 3 大威徳転法輪法

大威徳明王は降閻魔尊とも称され、死の王・閻魔を降伏する絶大な威力を持つ明王である。五大明王の一尊として祀られることもあるが、単独でも調伏法の本尊として用いられた。図13のように、六面六臂六足、額に第三眼を開き、髪を逆立てた忿怒相を示す。手には弓矢を構え（根本印を結ぶケースもある）、さらに剣・戟・宝棒・法輪（または索）などの武器を持つ。そして通常は、うづくまる水牛の背にまたがっている。

一方、図14のように、疾走する水牛の背に立つ場合もある。大威徳転法輪法の本尊像である。大威徳転法輪法に関して、平安時代末期に編纂された図像集『覚禪鈔』に、まとまった記載がある。<sup>(16)</sup>

「大威徳転法輪 禅林寺流云

調伏或修隱形法云々 瞿醯經云。金剛墻尊云々 此意歟

種子  或 

三形 輪 六幅或八幅

本尊 牛走 箭ヲハケ。弓ヲ曳。大海走向像也。箭前有輪。殊有効驗云々<sup>(17)</sup>

印 用胎藏転法輪印。隱形印云々

真言 用心呪。普通大呪也

結転法輪印。印之上有我身。成本尊。從十方世界兩輪。籠我身誦呪云々


或云。自此印無量輪踊出。遍十方摧破魔軍。行者身上前後左右圍遶。其身埋隱天魔波旬障礙。不得其便。

（中略）

或伝云。以茅人形置壇上每時本尊壇終。發遣以前用之。以鏹印。彼胸間三度可指。心呪三返誦後。以刀三切。投呂火。可燒之

（中略）

永嚴僧都説

種子 

三形 輪 六輪

尊形 牛上輪。輪上立像也。引弓。牛前飛輪 仍古人名笠懸法云々 已上

これによれば大威徳転法輪法は、調伏や隱形を目的として行われる。修法の際には、行者が転法輪印を結ぶ。すると



印から無量の法輪が湧出して魔軍を摧破し、さらに行者の身を包み隠すので、天魔・波旬も災いをなすことができな  
い。なお、調伏の相手になぞらえた人形の胸を劔印で突き、さらに刀で三つに切って爐火に投じるという口伝もある  
という。

本尊たる大威徳明王は、走る牛の背に載せた法輪上に立ち、弓を引く構えをとる。牛の前方には法輪が飛んでいく  
という。このような図像の典拠となったのは、宗叡が請来した『曼殊室利焰曼徳迦万愛秘術如意法』である。同儀軌  
には、「以彼弓鑄（射の誤りか）勢也」「左三足立輪。右三足上。彼輪下有水牛」という、動勢に富んだ図像が説かれ  
ている。<sup>(18)</sup>

『覚禪鈔』によれば大威徳転法輪法は、平安時代末期に平氏が西へ敗走した後の兵乱を鎮めるため行われたという。<sup>(19)</sup>  
また鎌倉時代末期に編纂された『白宝口抄』では、北条義時を調伏するために、義時の名を書いたものを牛に踏  
ませたと記している。<sup>(20)</sup>

このような転法輪法本尊像の一例が、図14に挙げた醍醐寺の『醍醐本図像（祈雨法懸曼荼羅等）』所載の大威徳明  
王像である。頭を低くして疾走する牛は、後脚を蹴り上げている。その背には法輪が載せられ、明王は左足でその法  
輪の上に立っている。大きく前傾して弓に矢を番え、振り上げた右手に劔、左手に三叉戟、下ろした右手に宝棒、左  
手に繚索を持つ。背後には火炎光背が吹き上がる。

この図像は、疾走する動物の背（の法輪上）に右足を蹴り上げて立ち、大きく弓を引きしぼって射る構えを示す点  
で、Bタイプの摩利支天像にきわめて近い。ただ大威徳明王像では上手の持物が劔と戟であるのに対して、摩利支天  
像では刀と天扇となっている。下手の持物は、大威徳明王像では宝棒と索（法輪のこともある）であるが、摩利支天  
像では両手で鉞を持っている。なお図10の市神社・乙本では、左上手から放たれた法輪が勢いよく前方に飛翔して

おり、大威徳転法輪法において水牛の前を転がる法輪を想起させる。AタイプやBタイプのような摩利支天像は、天野信景が評したように、まさしく大威徳明王像の持物や座を改変したような姿といえることができる。<sup>(21)</sup>

#### 4 摩利支天の大威徳化

それでは、大威徳明王のような摩利支天像はいつごろ、どのような経緯で生じたのであろうか。

両者が結び付く蓋然性としては、共通の機能を有することが注目される。一つには調伏、もう一つは「隠形」という特殊な機能である。前述したように、通常、大威徳明王は調伏法の本尊として用いられる。また大威徳転法輪法でも、主たる目的は調伏や隠形であった。一方の摩利支天は、古来、隠形の機能で著名な尊格である。摩利支天の隠形について、阿地瞿多訳『仏説摩利支天経』では次のように記している。<sup>(22)</sup>

「日前有天名摩利支。有大神通自在之法。常行日前。日不見彼。彼能見日。無人能見。無人能知。無人能捉。無人能害。無人能欺誑。無人能縛。無人能債其財物。無人能罰。不畏怨家能得其便。仏告諸比丘。若有人知彼摩利支天名者。彼人亦不可見不可知」

すなわち、摩利支天は常に太陽の前を行くため、太陽の光に照射されて姿を見ることができない。したがって、あらゆる災難を避けることができる。また、摩利支天を信仰する者にも同様の効果があるとされた。

行者が具体的に隠形を実行する手段は、隠形印「摩奴印」を結ぶことである。<sup>(23)</sup>

▼ 左手を軽く握り、第一指で第二指の甲を抑える。掌に少し空間を設け、（第一指と第二指の間に）孔を作る。

▼ 右手で左拳の上を撫で、孔の上に蓋をかぶせるようにする。

▼ 左手は摩利支天の心、右手は摩利支天の身体と観念する。

▼ 左掌の中に自分を潜ませ、摩利支天の心中にいとと想念する。

▼ 右手は摩利支天の身が自分の頭上であり、守護してくれていると観念する。

ゆるく握った左手の掌中に行者（自分）を潜ませ、右手で蓋をすることの印相は、不空訳『仏説摩利支天経』では「安怛怛那印」と呼ばれ、口決類では「宝瓶印」とも呼ばれた。<sup>24</sup> 摩利支天の三昧耶形は通常は天扇であるが、宝瓶を挙げるとの説もあり、左手のゆるい拳を壺に見たて、その中に潜んで摩利支天に包まれていることをイメージした命名であろう。經典には、この隱形法により広く諸難を避ける機能が挙げられ、平安時代の諸尊法では護身の要法とみなされた。<sup>25</sup> 一方、摩利支天の調伏の機能に関しては、天息災訳『大摩里支善菩薩經』において、「降伏成就法」として表面化してくる。それは敵の人形を作り、敵の名を書いた屍衣を胸の中に入れ、釘を打つという作法である。同経には「降伏冤兵法」や「禁止冤兵不令侵境法」など、領土を侵略された時に行う修法も説かれている。<sup>26</sup> 泥で作った猪の口に敵主人形の足を入れ、腕の中に封じ込め、敵陣の土中に埋めて釘を打つ、と記される。敵に見立てたものに物理的ダメージを与える作法は、前述した大威徳転法輪法の作法と軌を一にする。

大威徳明王と摩利支天との間には、こうした機能の共通性に加えて、図像面でも通じる要素が認められる。図像集にみる三面八臂の摩利支天像は、動物の背の半月上に左足で立ち、持物として弓・矢・鉾を持つ点で、水牛の背の法輪上に左足で立つ転法輪法の大威徳明王像と共通する。面の数は大威徳明王が六面、摩利支天が三面で相違を示すが、ともに本面の左右に大きな脇面があり、額には第三眼を開いている。猪に立つ多臂の摩利支天像の大威徳明王化は、無理なく進行したと考えられる。

なお、このような変容が生じた時期については、現存作例がきわめて少ない尊格であるため、明確にできない。た

だ、弘安八年（一二八五）に開版された「九重守」では、摩利支天は天扇を持つ二臂の天女立像であるのに対して、江戸時代の「九重守」では、摩利支天は大威徳明王風の変化を遂げていた。

こうした状況から推測すると、摩利支天の大威徳明王化は、中世後期に起こった可能性が高いように思われる。<sup>(26)</sup> 兵乱が頻発した中世に、摩利支天は軍神としての性格を強めており、それが勇ましい摩利支天像の成立を促したのであろう。

## 5 軍神・摩利支天の芽生え

口決類を見る限り、平安時代の摩利支天は、もっぱら息災法の本尊であった。しかし平安時代末期になると、醍醐寺僧の間で武神としての性格が浮上してくる。

一二世紀前半の『厚造紙』は、醍醐寺三宝院の定海の口決を元海が筆記したものである。ここでは摩利支天を造像する際の口伝として、「或人云 弓下波数 以作之 可尋」と記している。波数は「はず」と読み、弓の弦を懸ける部位「筈」を指している。<sup>(29)</sup> 簡略な一文ではあるが、武器を素材とする点に摩利支天の武神的性格が認められる。

一三世紀後半の『幸心鈔』では、摩利支天法の主たる目的として、隱形と合戦の勝利を挙げている。<sup>(30)</sup> 『幸心鈔』は、醍醐寺三宝院流の末流である報恩院流の祖・憲深の口決を、親快が記したものである。

### 「摩利支天事

問。此法殊付何事可修乎。答。見儀軌。殊為魔縁界。暗夜旅宿之間。有怖畏之時。可祈念之間。隱形之印是心也。身ヲ入此印可思也。」

「或云。弓ノモトハスヲ以造ニ天形懸レ頸。或又臨ニ戰場ニ之者籠ニ大鳥之中ニ云々。降ニ伏敵軍也（中略）問。摩利支天ヲ弓ノモトハスニテ造由緒如何。答。如レ此事自ニ上古習タル事也。サレハ大海ワタス橋ノ下ケタニテ。大黒天神像可レ造ナト云モ指無ニ本説ニ平。此天殊為ニ合戦ニ可レ祈供也」

弓の下筈で摩利支天像を造り、首に懸ける。また戦場に赴く時は大鳥（元鳥＝髻の誤りか）の中に籠めると、敵軍を降伏できる。それゆえ摩利支天は、殊に合戦の勝利を祈願する尊であるという。なお、弓の下筈で造るのは上古よりの習いであって、大黒天像を橋げた材で作ると同様、経典などに典拠はないことも言い添えている。

小さな摩利支天像を護身のために携帯することは、摩利支天の経軌にも説かれている。たとえば阿地瞿多訳『仏説摩利支天経』では、一〜二寸ほどの摩利支天像を金銀白檀等で造像し、遠行の時、比丘であれば袈裟の裡に、優婆塞であれば髻の中に潜ませる。また紫檀の三寸像を作り、遠行の時、人に知られぬよう常に隠して身につけよ、という<sup>(31)</sup>。経典では旅中の安全を目的とするが、『幸心鈔』では合戦時の護身と勝利が目的として掲げられた。

同様の言説は、一三世紀後半の醍醐寺僧・教舜の『秘鈔口決』にも示されている。<sup>(32)</sup>

「御口ニ云。此ノ法ハ以ニテ隱形ニヲ為ストレ宗ト習也。故ニ夜行或ハ遠行等之時ニ作ニテ隱形ノ印ニヲ當レ心ニ。誦ニレハ同キ真言ニヲ除ニク一切ノ天魔悪鬼等ノ災難ニヲ也。又合戦ノ祈ニモ修ルレ之也。其ノ時ハ必ス弓ノハスヲ以テ作レ像ヲ。或ハ胄ノソテノ上へ。或ハモトトリノ中ニ持レハレ之必ス得ルレ勝ヲ也。平家兵乱之時ニ寛信法務令レメタリ勤ニ修セ此ノ法ニヲケルト云々。摩利支天経云。刀兵軍ノ中ニ護ルレ我ヲ文。合戦ニ行スル本文也」

すなわち摩利支天法は隠形を旨とし、夜や遠方に出かける時に行えば、一切の災いを避けることができる。また合戦のために修する時は弓の筈で造像し、鎧の袖や髻の中に持てば必ず勝つと記している。なお、摩利支天が合戦の守護神であることの典拠としては、天息災訳の経典ではなく、不空訳『仏説摩利支天経』の「刀兵軍中護我」の文言を挙

げている。

上記の口決から、鎌倉時代の醍醐寺僧（三宝院系）の間で、摩利支天は軍神と位置付けられていたことが知られる。江戸時代に編纂された動潮の『三宝院流洞泉相承口訣』「摩利支天法」においても、同法は隠形の法であって、敵陣に入る時や魔所に入る時に行うべきであると記しており、軍神という位置づけが受け継がれていることがわかる。<sup>(33)</sup>

## 6 兵法書にみる摩利支天

中世後期には、武士が護身のために摩利支天の隠形法を用いたことが、兵法書からうかがわれる。この時期の兵法は、陰陽五行説に基づいて合戦の日時を定めたり、軍神を勧請したりする、呪術的性格の強いものであった。中でも尊経閣文庫の『兵法秘術一卷書』と吉野・吉水神社の『兵法靈瑞書』は、南北朝時代に遡りうる古い兵法書で、ともに合戦に関する作法や儀礼を四十二箇条ほど挙げ、漢の高祖の軍師であった張良が黄石公から授けられたという兵法書に擬せられている。<sup>(34)</sup>

摩利支天に関しては、隠形印を結び真言を唱える作法が掲載されている。『兵法秘術一卷書』では「隠形の秘術の事」と題し、摩利支天の隠形の秘印と明（呪句）を解説する。それは左手を胸に当てて仰げ、その上に右の手を伏せて中を少し屈するポーズで、この時に唱える真言は「唵謝摩利伽陀羅ソハカ」または「唵摩利支寧諦々阿奈隱陀羅ソハカ」であるという。<sup>(35)</sup> 吉水神社の『兵法靈瑞書』では、「第二十 敵に隠れんと思時、隠べき秘術事」の項目で、太陽の前にある宝瓶は摩利支天の尊形であり、その中に入ると念じて「**唵** 摩利日天隱棲そはか」と唱えよという。これを行うと自分の姿は敵に見えず、しかも敵は七日後に滅びるとされた。<sup>(36)</sup>

室町時代後期の『出陣日記』でも、出陣時の身固めとして、摩利支天の印を結び真言を唱えることが示されている。ただしその印相には、だいぶ変容が生じている。両手とも第一指を内に入れて握り、膝の上に置く。次に左手を引き寄せて、ポロンの呪を三度唱えて手の中に入れ、左膝に戻して右手で覆う。摩利支天の真言を三度さすり入れる。その後、左右に向けて弾指するとい<sup>(37)</sup>う。

このほか、身体に摩利支天を帯びる作法もある。室町時代後期の成立と推測されている『兵具雜記并幕星咒』の、「具足之守の事」の項である。摩利支天と書いた文字を一字ずつ切り離して、甲や左右の袖、馬に縫い付けよ<sup>(38)</sup>う。このような作法は、摩利支天の小像を甲冑に隠し持つという、醍醐寺僧の口伝を想起させる。

やや時代が下り、江戸時代の兵法書の中には、摩利支天を兵法の源流に位置づけるものもある。寛永一〇年（一六三三）の序文をもつ『上泉流軍配正脈』には、太古、世に初めて戦が生じた時、摩利支天が帝釈天を助けて阿修羅との戦いを治め、その兵法が中国の諸仙を経て日本に伝来したとする系譜が詳述されている。<sup>(39)</sup>中世後期〜近世初期にかけて、摩利支天は軍神として重要性を増したことがわかる。

ところで中世の兵法は、真言を唱えたり印を結んだりするなど濃い密教色を有することから、その成立に密教僧が関与したと考えられている。<sup>(40)</sup>室町時代の処世訓『世鏡鈔』は、当時の兵法を「兵法者 只真言ヲ学也 手ニ結レ印ヲ口ニ誦 小呪ニヲ 経ヲ誦シ 陀羅尼ヲ満テ 文字ヲアツカフ趣ハ 正直正理ノ出家也」と評している。<sup>(41)</sup>

しかしながら、中世の兵法書に記されていた摩利支天の印相や真言は、通例とは異なるものであった。密教僧が用いた通有の摩利支天の真言は、「オン マリシ ソワカ」や「オン アジテイヤ マリシ ソワカ」等である。<sup>(42)</sup>兵法書の真言は、帰命の意を表す「オン」と、成就句「ソワカ」との間に摩利支天の名を入れる点で、通例の真言の形式を借りてはいるものの、だいぶアレンジされており、兵法の成立や運用に関与したのが「正直正理ノ出家」であった

とは断じがたい。『世鏡鈔』の文言は、風刺とも受け取れる。

なお『兵法靈瑞書』に関しては、吉野・吉水神社が元は吉水院と呼ばれた金峯山寺の塔頭であったことから、修験者の間で伝持されたとみなす説がある。<sup>(44)</sup>

修験道でも摩利支天は、隠形および調伏の尊として崇められたという。<sup>(45)</sup> 当山派修験道の行法や呪符などをまとめた『修験深秘行法符呪集』の中に、摩利支天関連の資料がいくつも見出される。修験道の資料で年代が明確なものは少ないが、ここに収録された切紙は、大部分が室町時代〜江戸時代初期の成立とされている。その中で卷二・六二「摩利支天一印法」は、隠形法を示したものである。<sup>(46)</sup> 身印を結んで「唵摩利支莎訶」と唱え、隠形印を結んで「唵阿爾底也摩利支莎訶」と唱える作法は、密教特有のものと変わらない。

一方、調伏には摩利支天鞭法という独特の行法が用いられた。卷二・六〇「摩利支天鞭法」によれば、日輪に「破敵」の文字、もしくは敵の名を書き、摩利支天の真言を唱えて鞭で突くという。<sup>(47)</sup> 敵の名を記したものに物理的なダメージを与える手法は、『大摩里支菩薩經』の冤敵降伏の行法に通じており、同経がヒントになった可能性もあろう。正統な密教の知識を備え、かつ独自のアレンジを施すことできる修験者が、兵法の儀礼の成立に際して一翼を担った可能性は高いであろう。

以上、忿怒形の摩利支天像をめぐる考察してきた。近世の男尊形摩利支天像の中で、疾走する猪に騎乗し大きな身振りで弓矢を構える六臂の像容は、もともと凶像や功能に共通する要素を有していた大威徳明王像の影響を受けて成立したと考えられる。中世に、摩利支天の軍神化が進んだことが、その要因となったのであろう。

なお、これらの摩利支天像は、左上手に軍配様の天扇を振り上げている。軍配は、星宿や日取りなどを記した兵法



の呪具である。信仰する神仏の梵字を書くこともあり、中央部に摩利支天の名を記すケースが多い。摩利支天の天扇に倣って、卍を書く例もある。<sup>(48)</sup>ところで天扇は、本来一面二臂の摩利支天像の持物であって、猪に乗る三面八臂の摩利支天像の持物ではない。しかし忿怒形の摩利支天像は、図像の源流である三面八臂の摩利支天像の持物・無憂樹のかわりに軍配様の天扇を持たされることで、一層軍神的性格が高まっている。こうして成立した忿怒形像は、軍神を必要としなくなった江戸時代中期には、『仏像図彙』に見るように、すでに摩利支天像の一典型として定着していたのであろう。

今回は、疾走する猪に乗る摩利支天像の図像に注目して成立過程を検討してきたため、個々の作品の個別の制作背景に踏み込むことができなかった。近世にはまた、忿怒形ではない摩利支天像にも変容が生じており、このユニークな尊格に、もうしばらく目を配っていくこととしたい。

#### 註

(1) 井出誠之輔「帝釈天像」(『国華』一三三三号 平成一七年三月)は、一四世紀の高麗仏画である聖澤院の摩利支天像についての図版解説である。井出氏は、聖澤院本の天扇の図様が卍でなく須弥山と日月であり、中国の帝釈天像に同様の天扇を持つ作品が見出されることから、聖澤院本を帝釈天像と判断された。

このタイプの摩利支天像は、静嘉堂文庫美術館にやはり一四世紀の高麗仏画が収蔵されており、曼殊院には室町時代の写しが存在する。なお、高野山宝寿院には江戸時代の摩利支天立像が伝来するが、合掌する手に挟んだ天扇に須弥山とおぼしき山が描かれ、口元には髭があるため、この像も帝釈天と思われる。

(2) 安然の摩利支天明天説は『授菩薩戒広釈』に記されており、『阿婆縛抄』や『東宝記』にそれが引用されている。

(3) 『大正新修大蔵経』(以下、『大正』と略す) No. 二二五七 第二二卷二六二―二八五頁

(4) 『別尊雜記』所載「成蓮房」の口決の次に、「摩里支菩薩經云 天息災訳」の見出しで経文が引用されている(『大正新修大

蔵経 図像部』第三卷六二八頁。以下、『大正図像』と略す。ところで、この直前には『摩利支天経』の経文が引用されているが、その文言は唐代の摩利支天経には見出せず、むしろ天息災訳『大摩里支菩薩経』と極めて近い。ここで注目されるのが、『覚禪鈔』『本書等』の「摩利支天経六卷 新渡。庵。法成寺本云々」という記載である（『大正図像』第五卷五一九頁）。九八六年に宋より帰国した裔然が、『摩利支天経』六卷を新たに請来したことが知られる。

さて、鎌倉時代後期に編纂された『大宝抄』には、天息災訳からの引用と『摩利支天経』（唐訳とは異なる）からの引用がともに収録されている（『大正図像』第一〇巻一一四五―一四六頁）。後者の文言には天息災訳と一致する部分がある一方で、天息災訳には見出せないものもあり、この『摩利支天経』は天息災訳とは違う経典とみなされる。こうした状況を検討すると、天息災が訳した『大摩里支菩薩経』七巻とは別に、内容と語句に共通性のある『摩利支天経』六巻が存在したと考えられ、裔然はこれを請来したかと推測される。

- (5) 『別尊雜記』（『大正図像』第三卷六三二頁）、『四家鈔図像』（『大正図像』第三卷九〇六頁）、『天部形像』（『大正図像』第七卷五九五頁）、『醍醐寺本図像（仏眼等）』（『大正図像』第四卷四頁）。なお『大正図像』の『覚禪鈔』には図が付されていないが、称名寺本では天扇を持つ二臂の天女坐像と三面八臂の立像の図が加えられている（『特別展密教図像―『覚禪鈔』の世界』神奈川県立金沢文庫 平成一〇年）

- (6) 仲家は長谷川等伯の息子・宗也の画系を継いでおり、長谷川派の下絵や粉本が多数伝来しているという。『美術の窓』No.三 一八 九八頁（第二九卷三号・通卷三三七号 二〇一〇年三月）

- (7) パーラ朝の摩利支天像の作例が報告されている。三面八臂で左面が野猪となり、七頭の野猪（御者がいるので猪車と判断される）に立つケースが多いようである。森喜子「パーラ朝の女尊の図像的特徴（一）」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』六号 一九九〇年二月

- (8) 三面六臂の立像で七頭の猪に立つ摩利支天像が、台北・国立故宫博物院の『大理国梵像図卷』に収められている。南宋時代、一二世紀後半の作と推定されている。またパリ国立図書館の摩利支天像（敦煌発見・P三九九九）は、三面八臂で七頭の猪車に乗っており、一〇世紀の作と推定されている。やや時代は下がるが、明の永楽元年（一四〇三）に出版された『摩力支天菩薩経』の挿図には、七頭の猪車に乗る摩利支天坐像が描かれている。光背や台座、装身具の意匠など、チベットの密教美術の影響が感じられる。

- (9) 正拙清澄の摩利支天像に関しては、次の論文を参照した。織田顕行「正拙清澄ゆかりの摩利支天像をめぐる」『アジア遊学』一四二号 二〇一一年五月。織田顕行「禪宗文化圏における摩利支天像の受容と展開―信濃小笠原氏ゆかりの開善寺の事例から―」『飯田市美術館研究紀要』二七号 二〇一七年三月
- (10) 『訓蒙図彙集成 一四 仏像図彙・増補仏像図彙』（大空社 平成二〇年）に収録の、東京都立中央図書館・加賀文庫本を参照した。なお『仏像図彙』の書誌に関しては、次の論文に詳しい。村角紀子「ウィリアム・アンダーソンと『仏像図彙』―日本美術史』形成期における欧文日本研究書の位置―」『美術史』一七三号 平成二四年一〇月
- (11) 前掲註10『訓蒙図彙集成』に収録の、国立公文書館・内閣文庫本を参照した。
- (12) 日下無倫「九重御守の流伝と開版の種々相―九重御守の書史的考察」『日本仏教史学』一卷一号 昭和一六年八月
- (13) 『法隆寺の至宝 昭和資財帳六 絵画』五三頁・図69（小学館 昭和六一年）
- (14) 高野山にも④と同図像の版画が存在するが、制作年代が不明である。あるいは近代に入るかもしれない。水原義栄『密教版画集成』図版四五（親王院 大正一五年）
- (15) 『随筆 塩尻』下巻 四六〇―四七頁（帝国書院 明治四一年）
- (16) 『大正図像』第五卷三六―九頁
- (17) 称名寺本の『大威徳転法輪法』では、この部分は「本尊 乗走レル牛弓箭曳テ大海向箭向テ輪書殊／有効験云々」と記され、小差が認められる。向坂卓也「称名寺本『覚禪鈔』のうち『大威徳転法輪法』および『灌頂抄』について―翻刻と紹介―」『金沢文庫研究』三一七号 二〇〇六年一〇月
- (18) 一行が漢訳した大威徳明王の儀軌。明王の図像について、次のような規定がある。「其身六面六臂六足。乘水牛。（中略）又六臂。所謂左一鈿二輪索三弓。右一劍二宝杖三箭。以彼弓鑄勢也。又六足。左三足立輪。右三足上 彼輪下有水牛。（中略）復像背有火焰。」（『大正』No.一二二九 第二卷九七頁）
- (19) 『大正図像』第五卷三七―一頁。なお林温氏は『覚禪鈔』に付された道場図の注記から、これが万愛法に基づく修法であったと論じている。林温「新出の大威徳転法輪曼荼羅」『国華』一一七六号 平成五年一月
- (20) 『白宝口抄』『大威徳法』には『覚禪鈔』と同様の口決を記し、その後、義時の例を加えている（『大正図像』第七卷七七頁）。『白宝口抄』は一三世紀後半―一四世紀前半に、東寺・宝菩提院の亮禪の口説を亮尊が記したものである。

- (21) 江戸時代前期の作と推定されている岐阜・阿那院の摩利支天像は、一面六臂の忿怒形で猪にまたがっている。猪は疾走せず静かに歩く姿を見せており、立ちあがって歩く水牛に乗るボストン美術館の大威徳明王像を連想させる。『岐阜・白鳥町の絵画―「白山」山下の信仰と美のかたち―』図七（白鳥町 平成一年）
- (22) 『大正』No.九〇一 第一八卷八六九頁。なお、梁代に漢訳された『仏説摩利支天陀羅尼經』や不空訳『仏説摩利支天經』においても同様である。
- (23) 『大正』No.九〇一 第一八卷八七〇頁
- (24) 摩利支天の隱形印は、以下の経軌にも説かれている。
- ① 不空訳『仏説摩利支天經』「安怛袒那印」(『大正』No.二二五五別本 第二卷二六一頁)
- ② 不空訳『末利支提婆華鬘經』「末利支印」(『大正』No.二二五四 第二卷二五六頁)
- ③ 不空訳『摩利支菩薩略念誦法』「心真言印相」(『大正』No.一二五八 第二卷二八五頁)
- 口決類では、菴室印・密室印・金剛城印・甲冑印等の別称も用いられた。
- (25) 『十卷抄』、『別尊雜記』所載の勝定房口決、『沢鈔』などが挙げられる。
- (26) 「降伏成就法」(『大正』第二卷二七〇頁)、「降伏冤兵之法」(同 二六四頁)、「禁止冤兵不令侵境法」(同 一八〇頁)
- (27) 東福寺龍吟庵の、無闍普門像(二三世紀末)に納入されていた。また正安四年(一一三〇二)に完成した西大寺の文殊菩薩像からも、同じ九重守が発見されている。ちなみに、一三世紀に制作された金沢文庫の十二神將像に、未神將の本地仏として摩利支天が描かれているが、やはり右手に天扇を持つ二臂の天女形である。
- (28) 千葉・栄福寺の千葉妙見大縁起絵巻には、横向きの白い猪上に立つ一面六臂の男尊形摩利支天が描かれている。右手に矢・植物の葉・剣、左手に弓・法輪・羅索を取る。控え目ながら忿怒の表情を浮かべる。この絵巻は享祿元年(一一五二八)に原型が成り、天文一九年(一一五五〇)に詞書が増補されて完成したとみなされている。その後傷みが生じたため、絵は延宝六年(一六七八)に狩野派の絵師・片山三清守長により描き直された。したがって、現在の摩利支天像は江戸時代の絵であるが、元の図像に忠実に倣ったのであれば、室町時代に遡る可能性がある。持物として弓矢の他に剣が加わる一方で、樹木の葉や羅索など摩利支天本来の持物も備えており、武神への過渡的状況がうかがわれる。なお千葉妙見大縁起絵巻に関しては、次の文献を参照した。宮原さつき「千葉妙見をめぐる神仏」『妙見信仰調査報告書』三 千葉市立郷土博物館 平成六年三月。『紙本

著色千葉妙見大縁起絵巻』 千葉市立郷土博物館 平成七年（一九九五）

(29) 『大正』第七八卷二八二頁

(30) 『大正』第七八卷七五二頁。『幸心鈔』は、建長二年（一二五〇）〜弘長三年（一二六三）にわたって伝授された憲深の口法を親快が記したものである。

(31) 『大正』第一八卷八七〇頁、八七四頁

(32) 『真言宗全書』第二八卷五〇三頁。『秘鈔口訣』は文永頃（一二六四〜七四）に成立し、弘安頃（一二七八〜八七）に改訂されたという。

なお、弓の筈で摩利支天像を造るという言説は、興然が建久五年（一一九四）に著した『四卷』にも見出される。「弓ノハスニテ摩利支天ヲ造事アリ。可尋之」『大正』第七八卷八一五頁。また『白宝口抄』でも、「或云。以弓強造摩利支天像。安髻中云々。」と記している（『大正図像』第七卷一八〇頁）。

(33) 『三玉院流洞泉相承口訣』第八「薄二重伝授手鑑 乙」〔『真言宗全書』第三三卷二四六頁〕。なお同口訣の第一一「秘鈔伝授手鑑 第三」にも同様の記載がある（『真言宗全書』第三三卷三三二頁）

(34) 石岡久夫「古伝兵法学の成立と伝流（一）」『日本兵法史』雄山閣 昭和四七年

尊経閣文庫の『兵法秘術一卷書』には文和三年（一二三四）の奥書と、正和三年（一二三四）の本奥書がある。吉水神社の『兵法蓋瑞書』は、正平一四年（一二五九）に著されたものを応永二六年（一四一九）に写した旨の奥書がある。

(35) 『日本古典偽書叢刊 第三卷』所収「兵法秘術一卷書」四三〜四四頁（現代思潮新社 二〇〇四年）

(36) 『日本兵法全集』第六卷六六頁（人物往来社 一九六七年）

(37) 『続群書類従』第二五輯上 六一頁。『出陣日記』には応永二九年（一二四二）の年紀があるが、信頼性が低く、室町時代後期の成立と推定されている（『群書解題』三二「武一七九 出陣日記」）。

(38) 『続群書類従』第二五輯上 四四頁

(39) 『日本兵法全集』第六卷 八〇〜九〇頁（人物往来社 一九六七年）

(40) 前掲註34論文

(41) 『続群書類従』第三二輯上 二七九頁。『世鏡鈔』は、仏教的立場から政道や処世の心得を論じた書で、室町時代の成立と考

えられている（『群書解題』八「雑三〇九 世鏡鈔」）。

(42) 資料間で真言の表記に用いる文字に差異があるため、片仮名表記とした。なお根本印と「オン マリシ ソワカ」、隠形印と「オン アジテイヤ マリシ ソワカ」を組み合わせるケースが多いようである。マリシの次に「曳」字を加えることもある。

(43) これらの兵法書では摩利支天以外の神仏にも言及し、その中には他に例のない独特な名称の神仏も見出される。正統的な仏教の教説にはない、不審な神仏名であることが指摘されている。佐伯真一「軍神（いくさがみ）考」『国立歴史民族博物館研究報告』一八二集 二〇一四年一月

(44) 石岡久夫「日本兵法学の諸流」『日本兵法全書』第六卷

(45) 宮家準「修験道における調伏の論理」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』六号 一九六六年三月

(46) 『増補新訂 日本大蔵経』第九四卷三八頁

(47) 『増補新訂 日本大蔵経』第九四卷三六〇～三八頁

そのほか巻六・二〇七「具足加持 武具加持」や同・二〇八「武具加持」の項でも、行法の際に用いる種子や印の中に摩利支天が含まれている。具足や武器に摩利支天を加持することは、甲冑に摩利支天の文字を配分する『表具雑記』の作法、さらには摩利支天像を鎧や髻に忍ばせる『秘鈔口決』の作法を想起させる。

(48) 『兵具雑記』「団子拵る事」『続群書類従』二五輯上 五一頁

#### 図版出典

図1、3、13 『大正新修大蔵経 図像部』第三卷

図2 『仏教の美術』展図録 静嘉堂文庫美術館

図4、5 『訓蒙図彙集成』第一四卷 大空社

図6、7 『日本の仏教版画―祈りと守りの世界』岩崎美術社

図8、11、12 『六角堂能満院仏画粉本 仏教図像聚成』法蔵館

図9、10 『天上界のほとけたち』展図録 滋賀県立琵琶湖文化館

図14 『大正新修大藏經 図像部』 第四卷

摩利支天をめぐる言説と美術②男尊像（吉田）



図1『十卷抄』所載 二臂・摩利支天像



図2 帝釈天像（伝摩利支天像）  
聖澤院 高麗 14世紀



図3『十卷抄』所載  
三面八臂・摩利支天像



図4 元禄版『仙像図彙』所載  
一面六臂・摩利支天像





図6 宗存版「九重守」所載 摩利支天像



図5 天明版『増補諸宗仏像図彙』所載  
三面六臂・摩利支天像



図8 摩利支天像（六角堂能満院仏画  
粉本 2233号）京都市芸大蔵



図7 摩利支天像 個人蔵



図9 摩利支天像（甲本）  
市神社蔵



図10 摩利支天像（乙本）  
市神社蔵

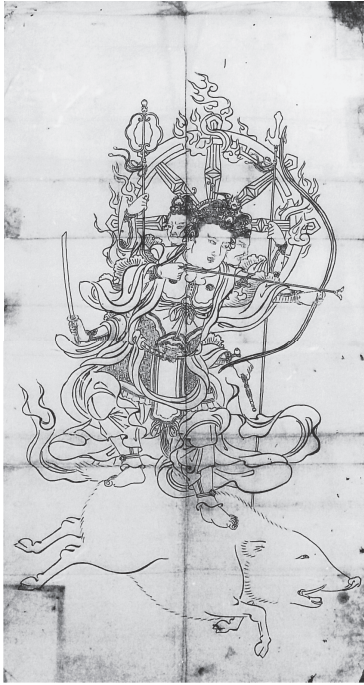


図12 摩利支天像（六角堂能満院仏画粉本 2232号）京都市芸大蔵



図11 摩利支天像（六角堂能満院仏画粉本 2231号）京都市芸大蔵



図14『醍醐本図像（祈雨法懸曼荼羅等）』所載 大威徳明王像



図13『別尊雜記』所載  
円心様・大威徳明王像

摩利支天をめぐる言説と美術②男尊像（吉田）